

# 〔1〕 ありのまま自立特別賞

石川 准 氏

〔静岡県在住〕



## ●プロフィール

1956年富山県魚津市生まれ。16歳の時に網膜剥離により失明、以後全盲。筑波大学附属視覚特別支援学校高等部を経て東京大学に進学し、同大学院で社会学を専攻。1984年にはニューヨーク州立大学ストーニーブルック校大学院博士課程へ留学。1989年より静岡県立大学で教鞭をとり、2022年に名誉教授となる。

## 【学歴・職歴】

- 1981年3月 東京大学文学部社会学科卒業
- 1983年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 1984年8月 ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校大学院博士課程留学
- 1987年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
- 1989年4月 静岡県立大学国際関係学部専任講師
- 1994年5月 同 助教授

1997年4月 同 教授  
2015年4月～2021年3月 東京大学先端科学技術研究センター特  
任教授（兼任）  
2022年 静岡県立大学名誉教授

## 【学位】

1995年3月 社会学博士（東京大学）

## 【主な社会活動】

障害学会会長（2003年～2007年、2021年～現在）  
内閣府障害者政策委員会委員長（2012年～2023年）  
国連障害者権利委員会委員・副委員長（2017年～2020年）  
全国高等教育障害学生支援協議会代表理事（2014年～2023年）  
全国視覚障害者情報提供施設協会理事長（2010年～2013年）  
有限会社エクストラ代表取締役

## 【受賞歴】

2000年10月 情報化促進貢献個人等表彰 通商産業大臣表彰  
2008年10月 第3回近藤正秋賞  
2009年10月 第6回本間一夫文化賞  
2012年12月 第6回塙保己一賞・大賞  
2023年9月 第40回鳥居賞  
2024年11月 第61回点字毎日文化賞

## 【主要研究テーマ】

アイデンティティ・ポリティックス論  
障害学(disability studies)  
感情社会学

## 【支援機器開発】

日本語自動点訳ソフトウェア：EXTRA  
Windows スクリーンリーダー：JAWS 日本語版  
点字携帯情報端末：ブレイルセンスシリーズ日本語版  
歩行支援アプリ：GPS レーダー  
歩行支援機器：トレッカーブリーズ日本語版

携帯型 OCR マルチプレーヤー：センスプレーヤー など

## 【著書】

『アイデンティティ・ゲーム：存在証明の社会学』新評論 1992（単著）

『障害学への招待：社会、文化、ディスアビリティ』明石書店 1999（編著）

『人はなぜ認められたいのか』旬報社 1999（単著）

『障害学の主張』明石書店 2002（編著）

『見えないものと見えるもの』医学書院 2004（単著）

『身体をめぐるレッスン3 脈打つ身体』岩波書店 2007（編著）

『障害学の展開－理論・経験・政治』明石書店 2024（編著）

『障害者権利条約の初回対日審査』法律文化社 2024（編著）

## ●障害名

網膜剥離のため失明し全盲

## ●日本の障害者政策・法制度への関わり

内閣府障害者政策委員会委員長として、障害者基本計画策定、障害者差別解消法改正、障害者差別解消法基本方針策定、障害者権利条約実施の国内監視

## ●国際的な活動（国連障害者権利委員会について）

国連障害者権利委員会委員として、各締約国の権利条約実施の監視、一般的意見の策定等

## ●日本障害学会の活動について

障害学の研究者に発表の場を提供するための学会誌の発行と学会大会の実施等

## ●思い出に残る出来事

障害者権利委員会の対日審査での独立した監視枠組みの責任者としての冒頭ステートメント

## ●活動の中で大切にしていること

## 建設的対話

前に進むことと置き去りにしないことの両立

### ●座右の銘

己を追う

### ●今後の目標

AI を活用した支援技術開発

### ●受賞談話

本日は、このような栄誉ある「ありのまま自立特別賞」を賜り、誠に光栄に存じます。ご推薦いただいた選考委員の皆様、そして長年にわたりご支援くださった関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

振り返れば、数多くの障壁に出会いました。しかし不思議なことに、その一つ一つの課題を解決しようと試みる過程そのものが面白く、気がつけば様々なことに夢中になって取り組んできました。そうこうするなかで、しばしば自分には荷が重い役割を引き受けることにもなりました。そして、ずっとそうした役割に追いつこうとしてきました。特に印象深いのは、国連障害者権利委員会での活動です。日本の対日審査において、独立した監視枠組みの責任者として冒頭ステートメントを行った際は、国際的な場で日本の障害者の声を伝える重要な役割を担っていることを強く感じました。

大切なのは、「建設的対話」です。異なる立場の人々を拒絶するのではなく、対話を重ねることで、「前に進むことと置き去りにしないことの両立」が実現するのだと思います。

今後は、AI を活用した支援技術開発など、これからも、障害のある人もない人も、誰もが「ありのまま」で生きられる社会の実現に向けて、自分にできることをしていこうと思います。

ご列席の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げ、私の受賞談話とさせていただきます。ありがとうございました。

## 【選考理由】

石川氏は内閣府の障害者政策委員会（障害者基本計画の策定または変更に当たって調査審議や意見具申を行うとともに、計画の実施状況を監視や勧告を行うことを目的として、内閣府に設置された機関）で10年間委員長を務め、障害者差別解消法の制定やその後の改正、障害者権利条約批准など、日本の法制度の整備に大きく貢献し、日本が国際的な人権基準により近づくことになりました。国内にとどまらず、2017年から2020年まで国連障害者権利委員会の委員および副委員長を務め、日本初の委員として参加し国際的な議論に深く関与し、日本の障害者政策が国際基準と整合するように大変尽力されました。

自身は高校1年の時に網膜剥離で失明し、その後点字を独学し、東京大学に点字受験で初の合格者となりました。さらに「障害学」を初めて日本に導入し、障害者への障壁を取り除くのは社会の責務とする「社会モデル」の考え方を日本に紹介し、障害者の権利に関する議論を深める役割を果たしてこれ意義は大変大きいものがあります。日本の障害者政策、障害者福祉の形成に重要な影響を与え、現在も日本を代表する存在として活躍しておられます。石川氏は既に数多くの賞を受賞されていますが、その実績として挙げられる「障害学」は現在の障害者施策に大きな影響を与えており、石川氏の活動がなければ成しえなかったことであり、将来への更なる成果として大変評価したいと思います。自立大賞を休止し、見直すにあたりこれまでの本賞の趣旨の区切りとして、過去の自立大賞を超えた「特別賞」に値するとの結論に至りました。今後も日本はじめ世界の障害者政策の中心を担っていく存在であると共に、石川氏の指導を受けた多くの研究者が育っていくことを願い、期待しています。